

編集後記

昨年の酷暑に引き続き、今年は暖冬となり、都心では2月に18℃を超える日もありました。4月号が皆様のお手元に届く頃は、桜の季節はすでに終わっているかもしれません。

ところで、十数年ほど前に当科に紹介受診歴のある患者さんから投書がありました。当時は骨系統疾患であろうとのことで確定診断には至らなかったようですが、社会人になってから他医で、ある遺伝性代謝性疾患であることが指摘されたとのことでした。もし当科受診時に診断されていたのであれば、適切な薬物治療が受けられ病勢が進まなかったのではないかと、いった内容のものでした。低身長と関節変形といった特徴的な骨格病変を生じることから整形外科の教科書にも載っていた疾患であったので、私もその名前は聞いたことがありました。しかし現在では、酵素補充療法の適応となることから早期に小児科にコンサルトして治療を開始しなければならないことなどは、恥ずかしながら全く知りませんでした。整形外科領域における外科治療は飛躍的に進歩していますが、薬物療法を中心とする保存治療もまた日進月歩です。

今回、「薬物療法が奏効する整形外科疾患」という特集を、田中 栄先生にご企画いただきました。これまで整形外科の外来で最も頻繁に処方されてきた薬物は、非ステロイド抗炎症薬やその他の疼痛治療薬だと思います。しかしこれらは疾患を治癒させるものではなく、主に対症療法にとどまります。関節リウマチは

すでに標準的薬物治療が確立しており、その寛解導入率は飛躍的に改善し、関節破壊の阻止も可能となっています。早期の診断と治療介入が重要です。Common diseaseである骨粗鬆症は、活性型ビタミンD₃薬、SERM、ビスホスホネート製剤、副甲状腺ホルモン薬など様々な薬剤が開発されており、その適切な薬剤選択、その後の逐次療法などは日々進歩しています。骨形成不全症や軟骨無形成症に対しては、私は手術治療しか知りませんでしたが、現在では薬物療法も行われているようです。さらに、FGF23関連低リン血症性くる病・骨軟化症、低ホスファターゼ症、ムコ多糖症、そして脳神経疾患など、薬物治療が有効なものが少なからずあります。われわれはその薬物療法を理解しているのでしょうか。これらの患者さんは特徴的なX線所見、低身長、四肢の変形、痛みや神経症状などで整形外科を初診することが多いと思われ、われわれ初診医の責任は大きいものと思われます。

もちろん、高橋先生が関節リウマチの項でも述べているように、薬物療法だけですべてに対応することはできません。手術や理学療法といった非薬物療法と組み合わせたトータルマネジメントに長けている整形外科医の役割は、臨床の現場において重要です。本特集号が、日常診療のお役に立てることを期待しております。

(石橋恭之)

「整形・災害外科」第67巻 第4号（4月号） 2024年4月1日発行（毎月1回1日発行） 定価 2,970 円（本体 2,700 円＋税 10%） 年間購読料金 定価 45,980 円（本体 41,800 円＋税 10%） 〔年間13冊（臨時増刊号、増大号を含む）の誌代〕 〔年間予約購読者に限り送料無料〕	発行所 金原出版株式会社 発行者 福村直樹 〒113-0034 東京都文京区湯島2-31-14 TEL 03 (3811) 7165〔編集室直通〕 TEL 03 (3811) 7184〔営業部直通〕 FAX 03 (3813) 0288 www.kanehara-shuppan.co.jp 振替口座 00130-1-191269 印刷所 三報社印刷株式会社 広告申込先 (株) 文京メディカル TEL 03(3817)8036
--	---

- ・本誌に掲載する著作物の複製権、翻訳・翻案権、上映権、譲渡権、公衆送信権（送信可能化権を含む）、貸与権、二次的著作物への利用に関する原著者の権利は、金原出版株式会社が保有します。
- ・**JCOPY** <出版者著作権管理機構 委託出版物>
本誌の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。複製される場合は、そのつど事前に、出版者著作権管理機構（電話 03-5244-5088, FAX 03-5244-5089, e-mail: info@jcopy.or.jp）の許諾を得てください。